

# “深み”と云うこと

—文化の概念を廻って—

松 井 博 文

## I

我々が、絶対的一元論を直ちに引き合に出す事を控えてこの世界を見る時、全てが二元的な色合に分けられ、そのような対立となって現われる事に気が付く。西欧人は自からの歴史の中に、ギリシヤ精神とユダヤ宗教を錯雑な事件の背後に繰返し見る。<sup>1)</sup> 二十世紀は科学と宗教の分離が深まっていく危機の時代であると云う。日常会話に於て、私達はAを理性的であると云い、Bは感情的であると云う。哲学は、随分と昔から、空間と時間と云う言葉を扱ってきた。濃淡深淺はともかく、哲学者から熊さん八さんに到るまで、使い分けてきた二元的なものは、つまりつまって人間そのものの中に存在している事に気が付く。人間を離れては何事も始まらないし本質的な問題もあり得ない。人間の内に存する二つのもの、これにどのような光をあてるかと云う事は重要な本質的な問題である。更に、その二存在がそれぞれにどう云う認識形式を持ち、どう云う限界があるか、そしてこの二存在は接触点を持つか或いは持たないか、と云った問題が後に控えており、これらの事が少しでも判然とした形を現わしてくれるならば科学上哲学上のもつれた糸の多くが解きほぐされていくかもしれない。何故ならば、もし科学や哲学が人間の内にある二つの認識形式をはっきりと区別していないとしたら、又どちらか一方に多く依って思考する時その思考形式の限界をわきまえていないとしたら、そこに展開される理論は必然的に矛盾を蔵し、その矛盾の解決は新たな矛盾を生むと云った悪循環に終始するからである。フランスの哲学者 H. Bergson は、彼の最初の主要論文 *Essai sur les données immédiates de la conscience*

に於て、上記のような問題意識に立って「自由」の問題を取扱かっている。その原序に次のような言葉が見える。「我々が言ひ表はすのは語による外はなく、かつ大抵は空間に於て考へる。別の言葉で云へば、観念相互の間に物質的対象相互の間に於てと同じきっぱりして明確な区別、同じ非連続性をたてることを、言葉が要求するのである。この同一視は、實際生活に於て役に立ち、大抵の科学に於て必要である。けれども、哲学的問題の或るものが惹き起す打ち克ち難い困難は、空間を占めない現象を空間のうちに並べること固執することから来るのではないか、争論の中心となる粗雑な心像を捨て去ることによって争論に結末のつけられる場合も屢々ではないかを問ふことが出来ると思ふ。拡がりのないものを拡がりのあるものに、性質を分量に訳す不当な翻訳が提出された問題の核心に矛盾を据ゑ付けてゐるとき、与へられるその解決のうちに再び矛盾が現はれるのが驚くべきことであろうか。……」<sup>2)</sup> Bergson は、この二元的世界を空間と時間と云う概念に基づいて追求する。Bergson の云う空間は、科学、理性、分量と云った言葉を包含し、時間は、宗教、感情或いは本能、性質、と云った言葉につらなっている事がわかる。<sup>3)</sup>

*Essai sur les données immédiates de la conscience* (邦訳「時間と自由」岩波文庫) に於て Bergson の述べている事の概要は次の通りである。

先ず第一章に於て、我々の常識が「純粋な強度」を全く拡がりと同様「大きさ」として打ち立てる事を追求する。「二種の分量、第一の外延的な測定出来る量と第二の強度的の、測定を許さない<sup>4)</sup> がそれにもかかはらずそれが他の或る強度よりも大きいとか小さいとか云ふことの出来る量とを、

習慣的に行はれるやうに区別するのは、それは困難の回避である。なぜなら、これによってこれらに共通の何かのあることを認めるものだからである。けれども、外延的なものと強度的なものとの間に、拡がりのあるものと拡がりのないものとの間に、大きさの見地で共通の何があり得るか。——中略——『より大』『より小』と云ふ言葉は二つの場合に於て同じ観念を喚起する。今この観念が何に於てなりたつかを自問してみると、意識が我我に示すのはやはり包むものと包まれるものとの形像である。より大きな強度の努力は、例へばより大きな長さの捲糸として、弛むとより大きな空間を占めるゼンマイとして思ひ浮べられる。強度の概念のうちに、強度を表はす語のうちにさへ、現在の収縮と従って未来の膨脹との形像が、潜在的な拡がりの、そしてかう云ってよければ圧縮された空間の形像が見出されるであろう。それゆゑ、強度的なものが外延的なものに翻訳されるのだと思はねばならない。二つの強度の比較の行はれるのは、少くともその云ひ表はされるのは、二つの拡がりの間の関係を混じて見ることによると思はねばならない。……」<sup>49</sup> この点で精神物理学がなしてきた事は常識の熟知している考を明確に方式化してその終極の帰結までこれを押し進めることに外ならないと指摘し次のように述べている。「物理学は内的状態の外的原因を計算に付することを正にその役割とするもので、内的状態そのものに関はることは出来る限り少なくする。絶えずことさらに内的状態とその原因とを混同する。だから物理学は、この点について常識の錯誤を勢づけ、拡大しさへする。科学が、この性質と分量との混同や感覚と刺激との混同に馴れて、後者を測る通りに前者を測らうとするときは、宿命的に来ないわけにはゆかなかつた。」<sup>50</sup> そして、強度の観念そのものは外から外延的な大きさの観念をもたらず流れと、内的多様性の心像を意識の深みに求めて行ってこれを表面に浮び出させる流れと、二つの流れの交流点に位置する<sup>61</sup> ものであると云う表現を使っている。

さて、次の展開の為にここまでの事を今少し要約してみるとこうなる。分量と性質の混同を故意に求めるが如き我々の日常意識が受けとめる「持続」とはどう云う事になるかと云うと、それは実

は空間に投射された時間的空間にすぎない。それでは、持続が展開される空間を除き去るとき内的状態の多様性はどんなものになるか、純粋持続はどんな形になるか？ Bergson は第二章に於てこの問題を扱っている。我々は、性質と分量の混同が日常生活に便利であるとしても問題を明晰にするとは思わないであろう。否寧ろ曖昧をつくり出すと考へて然るべきである。その意味に於て、Bergson が第二章で探究しようとする純粋性質の世界、純粋持続の問題は、非常に重要なものとなる。

私達は、少し思いを凝らしてみると、1と云う概念を二様に使っている事に気が付く。「 $1+1=2$ 」と云う場合の1と、「1にして全」と云う場合の1である。Bergson はこれを二種の多様性と対応させて追求する。つまり、意識事実が空間に投射されて直接に数を形成する多様性と、空間が介入しないまゝの意識事実の多様性である。Bergson は、人が鳴る鐘の音を聞く時の例をあげ次てのように述べる。「相継ぐ音を観念的空間のうちに並べて、それでこれらの音を純粋持続に於て数へてつつもりである。しかしこの点については了解して置かねばならない、確かに鐘の音は相継いで私のところに達するのである。けれども私は、これら相継ぐ感覚の各をひき止めて、それをその他のものと織り合せて或る既知の旋律やリズムを呼び起す一つの群に形成しようとするか、そうでなければ、明らさまにそれらの音を数へようとするかであつて、前の場合には、私は音を数へず、音の数が私に与へる云はゞ性質的印象を受け容れるに止まるのであり、後の場合には私はそれらの音を引き離さねばならず、この分離はこれらの音が、その性質を剥がれ或る意味で空になって、同一な通過の跡を残すところの何等かの等質的境界に於て行はれねばならないだろう。なるほど、この境界が時間に属するか、空間に属するかは、残された問題である。しかし繰返して云ふが、一瞬の時間は、他の瞬間に加へられるために保留されることはできない。音が引き離されるのは、音相互の間に空虚な間隔を残すからである。音が数へられるのは、それらの間隔が過ぎゆく音の間に止まっているからである。これらの間隔は、もし純粋持続であつて空間でないとするれば、どうして

止まっていることができようか。だから計算の行はれるのは、全く空間に於てである。それに、計算は意識の深みに突き入るに従って益々困難になる。茲では、我々は感覚や感情の錯雑した多様性に直面するのであって、それを区別するのは分析だけである。その数は、これらを数へるときにこれが充たす瞬間の数そのものと紛れ合さる。しかし互に加へ合せ得られるこれらの瞬間は、やはり空間の点である。結局そこから帰結してくることは、多様性には二種類あると云ふことである。直接に数を形成する物質的対象の多様性と、必ず空間が介入する何等かの記号的表象の仲介なしには数の姿をとることのできない意識事実の多様性と。』<sup>7)</sup> 「意識事実を数へるのにこれを空間に於て記号的に表象せねばならないとしたら、この記号的表象は恐らく内的知覚の正常の状態を変へはすまいか。心的状態の或るものの強度について少し前に述べたことを思ひ出してみよう。表象的感覚は、それ自身に於て観れば純粋な性質であるが、拡がりを通して見るとこの性質が或る意味で分量になる。それが強度と呼ばれるのである。かやうに、心的状態の個別的な多様性を形作るために行ふ心的状態の空間への投射は、この状態そのものに影響し、直接知覚がこの状態の形だとしなかつた新たな形を、反省意識に於て、これに与へるに違ひない。そこで注意しておくが、時間について語る時大抵は、意識事実が、空間に於てのやうに配列され並べられて、個別的な多様性を形成し得るところの等質的境域を考えるのである。かやうに解された時間は心的状態の多様性に対して、強度が心的状態の或るものに対すると同じく、真の持続とは全く別の標、記号ではあるまいか。だから我々は意識に対して、外界から離れて抽象の力強い努力によって再び自己自身になることを要求しようとする。それから意識に、次の問いを提出しようとする。意識状態の多様性は、一つの数の単位の多様性と少しの類似でももっているか。真の持続が空間と少しの関係でももっているか。確かに、数の観念についての我々の分析が、それ以上云ふまでもなく、我々にこの類似を疑はしめるに違ひない。現に、反省意識の表象するやうな時間は、数へ得られるやうに別々に意識状態が相継起する境域であり、又、我々の数概念は直接に数

へられるすべてのものを空間のうちに撒布することに帰着するのであるから、区別と勘定の媒介者の意味に解された時間は空間に外ならないと看做すべきなのである。この意見を先づ第一に確かにすると思はれるものは、反省意識のもつ時間感情を、また継続の感情でさへ、これを叙述するための形像は空間から借りる外ないと云ふことである。だから、純粹の持続は別のものでなければならない。しかし、個別的な多様性の観念の分析そのものによって提出するに到らしめられた問題は、空間と時間との観念をその相互関係に於て直接に研究せずしては、解明することができないだろう。』<sup>8)</sup> 要するに、感官は物体の性質を知覚し、性質と共に空間を知覚する。問題は、〈これらの性質は本質上拡がりのないものであって、空間はそれに付け加わって来るがしかしそれ自身充足して性質なしにも存在するものであるかどうか〉と云う、Kant が先験的感性論に於て展開したと同じ問題である。Bergson 自身も、Kant が感性の先天的形式と呼んだものとよく似た、精神の能動的関与と云う言葉を用い、これを考えることなしには説明のしようがないとして次のやうに空間を定義する。「空間は、幾つかの同一且同時の感覚を互に区別し得るやうにするものである。だから、性質的差別の原理以外の差別原理であり、従って性質のない一つの実在である。』<sup>9)</sup> すなわち、我々は秩序を異にする二つの実在を持つ、或いは、認識すると云える。一つは異質的で感覚的性質の実在であり、もう一つは等質的で即ち空間である。Bergson は、人間の知性によって明確に考えられるのは後者であり、それが截然たる区別を行ない、計算し、抽象することを、又恐らくは話すことも我々に可能にする、と述べている。<sup>10)</sup> ここに、社会生活と云うものが何を骨子として運滑をなししているかを知ると同時に、社会生活の大きな要素である言語の性格についても新たな認識の手掛りを得る。言語そのものが空間的構造を持ち、対象を固化すると云う性格を内在させている事。この事は、言語を使用する芸術家の作品を読む時ある程度理解し得るのであって、動いて止まない意識の奥の感情を社会生活の共通符号である空間的道具でもって表現しなければならない苦惱こそ、詩人の永遠の宿命と云えよう。

私達は、真の持続 (la durée vraie) の外延的符号である同質的持続の底に、異質な諸瞬間が相互に浸透する持続があることを見てきた。しかも私達は、大抵前者即ち同質的空間に投射された自己の影 (l'ombre du moi) で満足している。この事は、一面に於て、それが社会生活の要求、特に言語の要求に、よく適応し、社会生活の運滑に都合がよいからである。しかし又一方に於て、その事が、我々をして次第次第に自己の影を好ましめ或いはそれを真の自己と思わしめ、根本的自己 (le moi fondamental) を見失なわせるもとにもなっている。先に、現今物理学のなしてきたことは自己の影を寧ろ真の自己と錯覚させる方向に人々を促してきたと云う Bergson の言葉を抽出しておいたが、この事は、科学の歴史の浅い、又あまりに善良な人の多い日本に於ては特に重要な、注意すべき事柄であると思われる。

Bergson は第三章でいよいよ「自由」の問題に入っていく訳であるが、私はここで Bergson と別れて一人歩きをしなければならない。

私達は、言語が意識の底にある感情を完全に翻訳し得ないと云う結論に到らざるを得ない論旨の展開をみてきた。この事は思想についても同様であって、思想は言語では割り切れないまゝに止まる。<sup>11)</sup> 今任意に一つの抽象概念例えば民主主義をとってみよう。民主主義と云う言葉は、その言葉を初めて掲げた人達の集団だけが生理として納得し得る実体とその背後にあって、それが民主主義と云う言葉を息づかせていた。或いは、こう云ってよいならば、言葉の持つ不完全さを埋めていたはずである。言語、特に文学作品や歴史的用語として使われた言葉を味わい尽す為には、言語の持つ不完全さを埋めねばならず、その為には、その作品、その歴史的用語を息づかせている実体に触れると云う操作が不可欠になってくる。そんなことが可能であろうか？ 私達の経験は、可能な道を教えてくれているように見える。その作品、その歴史的用語に同化すること。詩の鑑賞とは、作品への (だから或る程度その作者の生理への) 同化であったし、永遠にそうであるはずである。私は無断で生理と云う言葉を二度使ったが、その使い方から察して、私が生理の世界を〈異質にして多様な意識の相互浸透の世界〉に組み入れていること

を了解されたい。生理及び生理的なものの特長は、それが自然の配慮であって私達の勝手に変えることのできない流れを持つこと、社会生活の場では (又健康体に於ては) ほとんど意識にのぼらず、個人的生活に於て (健康をそこなう時に於て) 意識にのぼり易いことである。又、不安とか恐怖と云ったものは密接に生理と結びついて我々の常でない意識の緊張を促すことは、我々の観察が教えるところである。更に、私は次のような例をあげる必要がある。海に潜る時、段々深くなってまわりに光が消えていき出すと私達はふと不安を感じるであろう。更に深く潜れば不安は容易に恐怖へと変わる。達しないまでも底がすけて見える時にはこうはならない。見えない底を意識する時、底しれぬ深みを意識させられる時、不安は恐怖に変わったはずである。そしてこの場合、深みと云う概念は恐怖と云う実体を通して完全に把握された、つまり私達の内にも初めて実在した、と云えないだろうか？ 恐怖は生理と結びついてこれを異常ならしめ、かような生理が深層の意識を激しく目覚まして日常の表面的意識が知らない世界を突然表面に押し上げる。否、こう云う表現は誤解を招き易い。実際はこれらのこと全てが同時に有機的に起こるのである。

この地球上に於て人間の関わる全ての物、全ての現象が、巨視的・微視的視点を適宜使いわけて眺める時、生理的なものとして写らないであろうか。私達の日常の意識には捕え難いこの生理的なものは、世に云う狂人や天才の恐怖の呻きを通して、その深みの側面を歴史の中に閃かしているのかも知れない。

次に、私が今述べてきたような「深み」と云うことを、「文化」と云う言葉を廻って具体的に考察してみたいと考える。「文化」と云う言葉を選んだ理由は、〈恐怖或は狂気を通してかいまみられる深み〉を示唆していると思われる例がそこにあったからであり、今一つは、「文化」と云う訳語に我々はどう云う実体を盛り込むべきなのか又日本人はその実体を盛り込む事に於て混乱をきたしてはいないか、という個人的な問題意識もあったからである。

## II

Joseph Conrad の小説に 'Heart of Darkness' というのがある。主人公は Kurtz と呼ばれるヨーロッパ人で、彼はアフリカ、コンゴの奥地で象牙採集の仕事をしている。そんな彼は、土人達の中であっていつしか土人のように、そして酋長のように振舞う男となる。彼は又 the International Society of the Suppression of Savage Customs なるものから、将来の参考の為に報告書を書く男でもあった。この未だ見たこともない Kurtz なる人物に、小説中の "私" (マーロウ) は関心を抱く。そして機会はマーロウをしてコンゴの奥地へと船をのぼらしめる。マーロウはそこで初めて Kurtz に会うが、そこに見たものは、アフリカの荒野の巨大な闇にとりつかれ Horror! と叫びつつ死んでいく Kurtz の異様な姿であった。<sup>12)</sup>

この小説に特別の関心を持ったと思われる人の中に、T. S. Eliot がいる。彼は 1888 年生れのアメリカ人である。ハーバード大学卒業後ヨーロッパに留学して第一次大戦に遭遇し、それ以来イギリスに留まり、1927 年そこに帰化している。彼は 1922 年に The Waste Land という詩を出して有名になるが、1925 年には The Hollow Men という詩を書いていて、実はこの中に Mr. Kurtz の名が顔を出しているのである。後年社会的立場からのエッセイを幾つか書くが、その一つ Notes towards the Definition of Culture は 1940 年代の作品で、この中に再び Mr. Kurtz の名が現われてくる。Notes towards the Definition of Culture とは随分もって回った言い方に見える。それは、Eliot と云う人の性格を表わしているとも云えるがそれ以上に、内容からみて、Culture の定義の困難さの意識がこのような姿勢をとらせたのだと解される。このエッセイは、introduction, 6 chapters, conclusion それに appendix として The Unity of European Culture から成っている。早速、Conrad の Heart of Darkness を直接引き合に出している部分に入っていくことにする。その一節は、少し長いが、次のようになっている。「We must remind ourselves of the danger, mentioned in the previous cha-

pter, of identifying culture with the sum of distinct cultural activities; and if we avoid this identification we shall also decline to identify our group culture with the sum of the activities of Dr. Mannheim's élites. The anthropologist may study the social system, the economics, the arts, and the religion of a particular tribe, he may even study their psychological peculiarities: but it is not merely by observing in detail all of these manifestations, and grasping them together, that he will approach to an understanding of the culture. For to understand the culture is to understand the people, and this means an imaginative understanding. Such understanding can never be complete: either it is abstract—and the essence escapes—or else it is *live*; and in so far as it is *lived*, the student will tend to identify himself so completely with the people whom he studies, that he will lose the point of view from which it was worth while and possible to study it. Understanding involves an area more extensive than that of which one can be conscious; one cannot be outside and inside at the same time. What we ordinarily mean by understanding of another people, of course, is an approximation towards understanding which stops short at the point at which the student would begin to lose some essential of his own culture. The man who, in order to understand the inner world of a cannibal tribe, has partaken of the practice of cannibalism, has probably gone too far: he can never quite be one of his own folk again.<sup>13)</sup> この後、注を打って、「J. Conrad の Heart of Darkness は類似した何かの示唆を与えてくれる」と Eliot は述べている。

Eliot が culture の概念をどのように捕えようとしているか、上の文章の中に、幾分うかがえることかできるかと思う。Culture に関する Eliot の幾つかの言葉を、断片的になるが次にあげてみることにする。

culture is not merely the sum of several

activities, but a way of life.<sup>14)</sup>

これは Appendix 中の次の言葉と思い合せれば、更に輪廓が深くはっきりとする。

「By ‘culture,’ then, I mean first of all what the anthropologist mean: the way of life of a particular people living together in one place. That culture is made visible in their arts, in their social system, in their habits and customs, in their religion. But these things added together do not constitute the culture, though we often speak for convenience as if they did. These things are simply the parts into which a culture can be anatomised, as human body can. But just as a man is something more than an assemblage of the various constituent parts of his body, so culture is more than the assemblage of its arts, customs, and religious beliefs.」<sup>15)</sup>

又、もともと私達日本人には馴染み易い、理解し易い表現でこう云っている。

culture may even be described as that which makes life worth living.<sup>16)</sup>

この言葉は、「ブリテンに於ける文化の衰退の一徴候は、食物を調理する技術に対する無関心さである」と云う身近な切実な感慨に続いて述べられている。

このような断片的な表現はあげれば切りがないのであるが、今一つ、日本人には逆に馴染みのない Eliot 独自の(しかしキリスト教社会の中でのみ生れ得る)文化の定義に関する覚書がある。

culture being, essentially, the incarnation of the religion of a people.<sup>17)</sup>

この表現には、人間の精神と肉体の営みの両面を、く二者択一的観念を避けて、有機的に、云い表わそうとする努力の結晶があ断続なりしかも、それに成功している見事さがある。「The first important assertion is that no culture has appeared or developed except together with a religion: according to the point of view of the observer, the culture will appear to be the product of the religion, or the religion the product of the culture.」<sup>18)</sup> 宗教の世界に身を浸さざるを得ないところに Eliot の文化

の概念を扱う意識の複雑さがあるのであるが、それが同時に、Bergson の〈直観の哲学〉と交差する時点にもなっているのである。

さて、Kurtz の死を別の視点から眺めるのによい手引となる言葉が三章にある。「It is human, when we do not understand another human being, and cannot ignore him, to exert an unconscious pressure on that person to turn him into something that we can understand: many husbands and wives exert this pressure on each other. The effect on the person so influenced is liable to be the repression and distortion, rather than the improvement, of the personality; and no man is good enough to have the right to make another over in his own image..... To offer another people your culture first, and your religion second, is a reversal of values: and while every European represents, for good or ill, the culture to which he belongs, only a small minority are worthy representatives of its religious faith.」<sup>19)</sup>

Kurtz は、「国際蛮習防止協会」なるものの為に報告書を書いていた。マーロウはその報告書のことに触れて、それが雄弁で美しく、「仁愛」の支配する、異郷的「無限さ」とでも云ったものを思わせた、と述べる。だが、その愛他的感情に切切と訴える報告書の最後に、何故 Kurtz は次の一句を書きこまざるを得なかったのか——‘Exterminate all the brutes!’<sup>20)</sup> Eliot の云う「価値の転倒」は、Kurtz にも容易に起こったはずである。しかも、「彼等蛮人の眼に我々白人は超自然的存在として映る云々」と報告書にかくほどに超異質的な二つの文化の極限状況に投げこまれて、白人の隠された優越意識がこの間隙を如何によく埋め得るか？ 更にこの二つの文化の背後には、二千年以上の時間が流れている。逆説的に、Exterminate all the brutes! の一句は、Kurtz のおかれた状況が極限的であり且つ根源的であればあるほど、第三者に文化と云うものの測り知れない側面を無気味に示唆することになるとも云える。ヨーロッパがよってたかつて作りあげた Kurtz の生理は、たった一人アフリカの荒野で土人達に

囲まれて住んでいるうちに、別の生理にぬり変えられていく。ヨーロッパへ連れ帰ろうとするマロウの船から、再びあの、火を焚き太鼓をたたく土人達の中へ、あの荒野の呪縛の中へ逃げ戻ろうとするほどに。<sup>21)</sup> Kurtz の知らぬ、アフリカが育てた荒野の文化が、易々とKurtz の意識を呑込んでいく。彼の意識は緊張する。定かならぬまゝに、巨大な闇が彼の意識に影を落とす。ちょうど海の底へひきづりこまれるように、彼の意識、彼の生理は、巨大な影を恐怖の中にはっきりと受けとめる。Horror! の一語が生れる。

ここで、Kurtz は虚構の中の人物ではないか？と云う疑問を抱かれる人があるかもしれない。しかしそれは再び振り出しに(つまり Bergson 哲学に)戻ることになる。

Heart of Darkness は虚構であるとしよう。先ず作者の側について云えば、どんな作者でも“純粹な想像的産物”はあり得ず、我々の生活の中から得たものを象徴的に虚構に組み立てるのであること、又、読者の側について云えば、同じように日常生活の諸々の現象の意味を虚構の中に一つの象徴としてみるのであって、その場合、“その象徴は実在する”と云い得るのである。このような精神作用がなければ文学が生き続ける訳はなく、これは云わば、文学に於ける暗黙の常識である。Eliot にとって Kurtz は実在する。何故なら、Eliot は自から海に潜ることによって Kurtz を発見したからである。

### III

Eliot は、彼のハムレット論の中でこんな事を云っている。『ハムレットの狂気—これは作中人物ハムレットにあっては行動に吐け口を見い出せない感情の道化騒ぎであり、劇作家シェークスピアにあっては芸術で表現できない感情の道化騒ぎに外ならない。……とにかく、対象を持たぬか或は対象を上まわった強烈な感情と云うものは、感受性の強い人なら誰でも経験していることであり、これは明らかに「病理学者の研究課題」である。』<sup>22)</sup>

対象を持たぬか或は対象を上まわった強烈な感情にとりつかれて意識が持続する時、意識は緊張のあまり病んでいく。どんなに平凡な人であろう

と、突然劇的な環境に投げこまれることによって、如何に劇的な人物に変わることか。極限的な例として私達は今、Kurtz の場合を見てきた。私は、同じような例を、しかも文化の問題を離れないで、夏目漱石の中に見い出せないだろうかと考える。

千谷七郎著「漱石の病跡」によれば、漱石の神経病顕現期は生涯に三回ある。この神経症は、漱石自身は神経衰弱とか狂気とか云っているもので、“意識の病気”と云ってもよいものかと思う。意識には二つの自我がある。日常の社会生活を滑らかに運ぶ為の表面的自我と、人間の全人格の依ってくる深層の自我。そして、意識は深層に下るほど分析を拒む多様性を持ち、しかも性質的な相互浸透の持続であることを、Bergson 哲学に於て見てきた。全ての人の前に同じ様に広がっている人生に、随分と違った模様を描かせるものは、二つの自我のどちらに多く依って生きるかである、と云う表現もできよう。漱石の生涯は、その全人格を深層の自我に立脚させ、そこから常に本質を生きる、と云ったものであったと私は感ずる。<sup>23)</sup> 漱石の人間像を理解する為には、日常の表面的自我の顕現だけでなく深層の自我の方により多く沈潜し、その断面が切れ目なく持続していく様を持続のまゝに把握すると云う操作が必要である。

漱石の一回目の鬱病期は明治二十七八年にかけて、ちょうど人生三十の直前にあたり、青年らしい理想と懷疑が内深く滾る時である。明治二十七年九月四日付正岡子規宛の手紙には、理由の漠たるまゝに、鬱積する不満と焦燥、そんな自分を荒海の怒濤に晒して瞬時快哉を叫ぶ心が綴られている。<sup>24)</sup> 翌年漱石は松山へ赴任していく。二回目は、明治三十四年から三十七年にわたって、英国留学期を含み、且つ「文学論」胚種の時期であって、私はこの「文学論」を一つの「文化論」として試論するつもりである。三回目は大正元年から三年にかけて、漱石四十六、七才の頃である。あるいはこの頃は、人間存在の不条理への認識が辛く漱石の心を被うと表現してはどうかと思う。大正三年三月二十九日付津田青楓宛の手紙には「…世の中に好きな人は段々なくなります。さうして天と地と草と木が美しく見えて来ます。ことに此頃の春の光は甚だ好いのです。私はそれをたよりに生きています。」<sup>25)</sup>と云った言葉が見られる。

しかし晩年の漱石の世界はよほど深く複雑であろうから、私の未だよく触れ得るところではないと思われる。

さて、明治三十五年三月十五日、英国留学中の漱石が岳父中根重一に宛てた手紙から、「文学論」胚種の意識の模様に触れる試みをしてみたい。一

「私も当地着後(去年八、九月頃より)より一著述を思ひ立ち目下日夜読書とノートをとると自己の考を少し宛かくのとを商賈に致候同じ書を著はすなら西洋人の糟粕では詰らない人に見せてもう一通はつかしからぬ者をと存じ励精致居候然し問題が如何にも大問題故わるくすると流れるかと存候よし首尾よく出来上り候とも二年や三年ではとても成就仕る間敷かと存候出来上らぬ今日わが著書杯事々敷吹聴致候は生れぬ赤子に名前をつけて騒ぐ様なものに候へども序故一応申上候先づ小生の考にては「世界を如何に観るべきやと云ふ論より始め夫より人生を如何に解釈すべきやの問題に移り夫より人生の意義目的及び其活力の変化を論じ次に開化の如何なる者なるやを論じ開化を構造する諸原素を解剖し其聯合して発展する方向よりして文芸の開化に及す影響及其何物なるかを論ず」る積りに候其様な大きな事故哲学にも歴史にも政治にも心理にも生物学にも進化論にも関係致候故自分ながら其大膽なるにあきれ候事も有之候へども思ひ立候事故行く処迄行く積に候云々」<sup>26)</sup>

これを、“空腹を抱えて御馳走をあれこれと思ひ浮べている”姿、つまり神経症の嵩じた結果の大抱負、一種の“偷安”と見る立場もある。<sup>27)</sup>しかしここでも又 Bergson の指摘した質と量の、純粋時間と時間的空間の混同がないかどうかを見て戴きたい。上記のような大抱負を抱かざるを得なかったが故に、空腹に似た現象が起るかもしれない事を、問題にできないかどうかを。「文学論」を読めば、それが書簡中の大抱負と切り離し得ない血を受けついでいることがわかるであろう。問題は、科学的分析を許す表面的自我の因果連結ではなく、家庭的社会的末事の底に一貫して持っている漱石の意識の流れである。「文学論」の覆っている世界、覆い尽そうとした世界は、“大抱負”の一貫した意識の所産である。それは“空腹を抱えて云々”と云えるように便利よく切断できない“流れ”なのである。

漱石は具体的なものとしては「文学論」を草した訳であるが、この時期に漱石の意識を最終的に捕えていたのは「世界」であり、「世界を如何に観るべきや」と云うことであつたと思われる。意識の拡りは、日本と云う身辺から、英国留学と云うのっぴきならぬ“経験”を通して(ちようど海面から海中へと云う形で)「世界」へと膨張する。「英文学に欺かれたるが如き不安の念」は大学院卒業当時既にあつたが、それは未だ漱石の全意識を被い尽すまでに熟することはなかつた。「文学論」の序は、かかる不安の念が、英国と云う地で、次第に膨張し強烈となり、ついに漱石の全意識を被い尽すに至る様を叙して迫力がある。不安は英国の地で演じられなければならなかつた。演じると云う形を通して、不安の実体につき当らねばならなかつた。

「大学を卒業して数年の後、遠き倫敦の孤燈の下に、余が思想は始めて此局所(漢学に所謂文学と英語に所謂文学とは到底同定義の下に一括し得べからざる異種類のものたらざる可からず=筆者挿入)に出会せり。人は余を目して幼稚なりと云ふやも計りがたし。余自身も幼稚なりと思ふ。成程見易き事を遙々倫敦の果に行きて考へ得たりと云ふは留學生の恥辱なるやも知れず。去れど事實は事實なり。余が此時始めて、こゝに気が付きたるは恥辱ながら事實なり。余はこゝに於て根本的に文学とは如何なるものぞと云へる問題を解釈せんと決心したり。云云」<sup>28)</sup>漢学に所謂文学と英語に所謂文学とは異種類のものであると云う実感を持った時、それでは一体文学とは何か? と自問するのは本質を極めんとする精神にとっては必然である。そしてここに我々も又、何故漱石が「世界を如何に観るべきや」と云う点から出發せざるを得なかつたかを窺い知るのである。根本的次元を求めて、意識は「世界」を包むに足りるだけ膨張しなければならなかつた。

漱石は自分の漢学に於ける力と英語に於ける力とに差はないと思う、と云っている。それでは「漢学に所謂文学と英語に所謂文学とは到底同定義の下に一括し得べからざる異種類のものたらざる可からず」と云う言葉は何処から出て来たのか。何を持って「違う」と云い得たのか。「英国人は余を目して神経衰弱と云へり。ある日本人は書を



本国に致して余を狂気なりと云へる由。賢明なる人々の言ふ所には偽りなかるべし。ただ不敏にして、是等の人々に対して感謝の意を表する能はざるを遺憾とするのみ。』<sup>29)</sup>「帰朝後の余も依然として神経衰弱にして兼狂人のよしなり。親戚のものすら、之を是認するに似たり。親戚のものすら、之を是認する以上は本人たる余の辯解を費す餘地なきを知る。ただ神経衰弱にして狂人なるが為め、『猫』を草し『漾虚集』を出し、又『鶉籠』を公けにするを得たりと思へば、余は此神経衰弱と狂気とに対して深く感謝の意を表するの至当なるを信ず。』<sup>30)</sup>「余が身辺の状況にして変化せざる限りは、余の神経衰弱と狂気とは命のあらん程永続すべし。永続する以上は幾多の『猫』と、幾多の『漾虚集』と、幾多の『鶉籠』を出版するの希望を有するが為めに、余は長しへに此神経衰弱と狂気の余を見棄てざるを祈念す。』<sup>31)</sup>

これは単なる意地であろうか、或は一種のユーモアがあるのか？ 漱石は、このような露骨な逆説的ユーモアを書く人とは思われない。この文章にある通り、漱石の神経衰弱と狂気とは生涯続いたのである。漱石は、自分の狂気が正常であることを意識していた。Kurtz は、自分が見たもの、しかも他人には伝え難い巨大な闇を、Horror! の一語に翻訳した。「文学論」の序は、寧ろ Kurtz の Horror! に当るものではないか？ 漢学に所謂文学と英語に所謂文学との間に、漱石は「生理」の亀裂を見なかったろうか？ 自然と不自然の間に生じた亀裂を通して、Kurtz が見たと同種の闇の奥をかいま見なかったろうか？

Eliot が Notes towards the Definition of Culture に於てとっている重要な視点の一つは、〈何が human beings にとって natural であるか〉と云うことであつた。人間は一粒の種の成長の生理を意のままにすることはできないと同時に、人間自身も又一粒の種のような存在である、と云う事実<sup>32)</sup>に立脚していた。漱石の立っていた次元、漢学に所謂文学と英語に所謂文学とは同一ならずと実感した次元は、Eliot が Notes towards the Definition of Culture に於てとっていた視点と同じである。違う点は、(こう云ってよいならば) 漱石が渦の中で実感を半分演じたのに対し、Eliot は渦の外で実感を思索した、と云う事であろう。

「倫敦に住み暮らしたる二年は尤も不愉快の二年なり。……」「帰朝後の三年有半も亦不愉快の三年有半なり。去れども余は日本の臣民なり。不愉快なるが故に日本を去るの理由を認め得ず。日本の臣民たる光榮と権利を有する余は、五千万人中に生息して、少くとも五千万分の光榮と権利を支持せんと欲す。此光榮と権利を五千万分一以下に切り詰められたる時、余は余が存在を否定し、若くは余が本国を去るの挙に出づる能はず、寧ろ力の継ぐ限り、之を五千万分一に回復せん事を努むべし。是れ余が微少なる意志にあらず。余が意志以上の意志なり。余が意志以上の意志は、余の意志を以て如何ともする能はざるなり。余の意志以上の意志は余に命じて、日本臣民たる光榮と権利を支持する為めに、如何なる不愉快をも避くるなかれと云ふ。』<sup>32)</sup>

漱石が英国で受けた抵抗感、どんな意味に於ても英国人と同種たり得ないことの実感は、狂気に至る深みの中に漱石だけが捕らえ得た巨大な肉の一片である。人間が自らの生理を通して、自らのよく御し得ぬ何かにぶつかることが、それほど不思議なことであろうか？ そのような何かにぶつかった人にとって、それは自分の意志以上の意志として映らざるを得ない。人間が、自らの意志を越えた意志を実感する時、彼のなし得ることは最も自然な形に殉じようとする「覚悟」だけであろう。漱石は日本人として生きんと欲する。明治のバックボーンとは、いつでも意識される用意のあったこの「覚悟」のことではなかったろうか？

人間の意志を越えた意志は、人間の存在の根本に関わる問題を孕んでいるはずである。思想は、それがどんな形を取るにせよ、生きると云うこと、つまり人間存在の一事に呑み込まれる。人は、思想を云々する前に先ず存在している。この一事に気がつかねば全てが始まらない、逆に、全てを包括しようとする時初めてこの一事に気が付く。「文学論」は何よりも先ずそのような動的な姿として私の目に映る。日本と云う国で培われた概念が、英国と云う異国の地で崩れていく。日本で浮れ騒いでいる開化とは何か？ 一等文明国とは即全人格的模範国の意味か？ 文学とは根本的に何ぞや？ そしてつまりは、世界とは何ぞや？ 「文学論」にはこれらの問が内在している。そしてこ

これらの問を有機的に包括してみることを Eliot が教えてくれた。つまり「文化」とは何か？

#### IV

Culture と云う語には、“生育する”意がある。それは土の匂い、一つの生理の概念を包んでおり、欧米人は culture の一語から汲もうと思えばそれらの概念を汲むことができる。しかし、日本語の「文化」には culture の語が持つ歴史の重みがない。私達は culture を持たないのではない。ただ culture に当るものを意識的に概念化する機会を持たなかったと云うことでもあろうか。(或は、現代からあまりにも遠く隔たってしまった過去の伝統の中に、culture に相応しい日本語が埋れているかもしれない。) しかも、世界的規模に於ける culture の定義づけはまだ始まったばかりのように思われる。そしてヨーロッパは、既に何人かの旗手を送り出したように見える。T. S. Eliot は、キリスト教の伝統を持つ西欧が送り出した旗手の一人である。西欧は今、機械文明が内在させていた精神への重圧の中で、再び精神を解放する為の努力を続けている。Eliot の場合には、それは culture の概念の再創造と密接につながっていた。東洋は、ヨーロッパと異なった歴史を持ち、機械文明がヨーロッパにもたらしている苦悩を知るにはまだ間がある。しかし、地理的には東洋に属すとは云え決して東洋の中に一括し切れない独自性を持つ日本は、明治維新後宿命的な「文明の押しつけられ」(漱石の云わゆる“外発的開化”)を経験し、戦後はヨーロッパと同じ位の機械文明を現出させた。日本はヨーロッパと対等の次元で、しかも独自に、精神と機械の、ひいては人間存在そのものの、本質的な問題に、発言し得る立場にある。そして、そう云う根本的な問題に欠かせない第一歩として、私達には不慣れな「文化」という言葉を先ず“受肉化”してかかることが必要なことではあるまいか。漱石の「文学論」には、視点を變えて学ぶ時、日本人の手になる恐らく最初の本質的な「文化論」が宿っていると思われるのである。

- 1) Ernst Troeltsch は、ルネッサンスと宗教改革の背後に、ヨーロッパ世界の二つの源泉の根源的対立を見ている。  
Renaissance and Reformation, 邦訳「ルネッサンスと宗教改革」岩波文庫

- 2) H. Bergson, Essai sur les données immédiates de la conscience: 邦訳「時間と自由」岩波文庫 p. 11 以下 Bergson の引用文は、すべて岩波文庫版による。
- 3) Bergson の四つの主要論文が、これらの言葉を誤解なく繋いでくれる。四つの主著は次の通り、「時間と自由」「物質と記憶」「創造的進化」「道徳と宗教の二源泉」いずれも岩波文庫、及びその邦訳。
- 4) Bergson, o. p. cit., p.p. 14~16.
- 5) Ibid., p. 72.
- 6) Ibid., p. 74.
- 7) Ibid., p.p. 86~87.
- 8) Ibid., p.p. 89~90.
- 9) Ibid., p.p. 93~94.
- 10) Ibid., p. 96.
- 11) Ibid., p.p. 157~158. 参照
- 12) J. Conrad, Heart of Darkness 研究社小英文学書。p. 112 の一節を上げておく  
“One evening coming in with a candle I was startled to hear him say a little tremulously, ‘I am lying here in the dark waiting for death.’ The light was within a foot of his eyes. I forced myself to murmur, ‘Oh, nonsense!’ and stood over him as if transfixed.  
“Anything approaching the change that came over his features I have never seen before, and hope never to see again. Oh, I wasn’t touched. I was fascinated. It was as though a veil had been rent. I saw on that ivory face the expression of sombre pride, of ruthless power, of craven terror—of an intense and hopeless despair. Did he live his life again in detail of desire, temptation, and surrender during that supreme moment of complete knowledge? He cried in a whisper at some image, at some vision—he cried out twice, a cry that was no more than a breath—“The horror! The horror!”
- 13) T. S. Eliot, Notes towards the Definition of Culture, London: Faber & Faber, paper covered edition. Chap. II, p. 41.
- 14) Ibid., Chap. II, p. 41.
- 15) Ibid., Appendix: The Unity of European Culture, p. 120.
- 16) Ibid., Chap. I, p. 27.
- 17) Ibid., Chap. I, p. 28.
- 18) Ibid., Introduction, p. 15.
- 19) Ibid., Chap. III, p.p. 64~65.
- 20) J. Conrad, o. p. cit. p.p. 79~80 参照
- 21) Ibid., p.p. 103~108 参照
- 22) T. S. Eliot, ‘Hamlet’ in Selected Essays, London: Faber & Faber.
- 23) 漱石全集そのものの外に、参考になった手引きは、小宮豊隆著「夏目漱石」(岩波書店)である。
- 24) 漱石全集第十四巻書簡集, p.p. 61~62.
- 25) Ibid., p.p. 199~201.
- 26) 漱石全集第十五巻続書簡集 p.p. 340~341.
- 27) 千谷七郎, 「漱石の病跡」勁草書房, p.p. 34~35.
- 28) 漱石全集第九巻, 文学論 序 p. 10.
- 29) 30) 31) Ibid., p. 16.
- 32) Ibid., p.p. 14~15.